

来者の群像 大江満雄とハンセン病療養所の詩人たち

目次

第一章 『いのちの芽』のあとさき

多磨全生園 山下道輔さん、国本衛さん

『いのちの芽』にいたるまで——園内文芸運動の隆盛／理解者をつくろう／
いはアジア／らい予防法の廃止と違憲国賠訴訟

第二章 教養講座のころ

栗生楽泉園 笹雄二さん、越一人さん

松丘保養園 福島政美さん

初対面、そのときの思い出／『高原』の詩の選者として／教養講座をつくる／
時代の変化とともに／詩作を超えた活動のひろがり

第三章 「交流の家」にこめた夢

栗生楽泉園 コンスタンチン・トロチエフさん

数奇な生い立ち／第一詩集『ぼくのロシア』刊行／回復者を社会へ／つきあいを
を広げる旅

第四章 楽団「青い鳥」とともに

長島愛生園 森中正光さん、河田正志さん、近藤宏一さん

戦後ハンセン病文学における「芽生え」／点字を舌で読む／光田健輔の評価をめぐって／島を渡るハーモニカの音色

87

第五章 私を立ち上がらせたもの

邑久光明園 中山秋夫さん、千島染太郎さん

『いのちの芽』参加者の印象／戦時以来の悪弊との闘い／詩の選者を永瀬清子に／天使とサタンの詩論——第一合同詩集『光の杖』／個々の顔を社会に向けて——第二合同詩集『こだま』／時流の中で——堂崎しげるさんの嘆息／「無償の句集」の発掘に取り組み／裁判に立ち上がる

109

第六章 語られない体験を詩に託して

大島青松園 中石としおさん、塔和子さん

瀬戸内海に浮かぶ島の療養所／戦時から戦後への文芸活動／大江満雄の青松園訪問／『青松』第一〇〇号記念の詩の選評／塔和子さんの登場／記録すること

139

——『青松』編集長として

第七章 待望の詩

菊池恵楓園 『炎樹』の詩人たち

取材が叶わなかった療養所／『炎樹』の存在／藤本事件への支援／療養所の未来構想／未来に向けて放たれた言葉

159

第八章 「来者」の声を受けとめる

星塚敬愛園 島比呂志さん

空はアイヌのいれずみ色／文芸同人誌『火山地帯』の創刊／『火山地帯』の復刊／来者は追うべし／裁判の提起、そして念願の社会復帰へ

183

第九章 医学と詩学とのつながり

神山復生病院 藤井俊夫さんの詩、その他

現代の宗教性／東北二園——大江が訪ねなかった療養所の詩①／奄美・沖繩三園——大江が訪ねなかった療養所の詩②／自己と非自己の相克——島田等さんの大江満雄論／関係的誠実をもとめて

207

大江満雄とハンセン病療養所の詩人たちに関する年譜

参考文献

232

人名索引

245

ハンセン病療養所一覧

247

あとがき

248

はじめに

詩人・大江満雄には、生前、二度会ったことがある。

一九八六年秋、東京宿毛会すくもという東京近辺に在住する高知県宿毛市出身者の集まりの席上だった。私は中学三年生。スーツで盛装する参加者が多いなかで、大江はつなぎのジーンズにベレー帽というひとときわ目立つ特異な姿であった。

会積をすると、こちらが相槌あいつづを打つ間もないほどの饒舌じょうぜつで話しかけてきた。相手が中学生だからと話のレベルを下げるのではなく、自分が真剣に語りたいたことを、そのまま熱っぽくぶつけてくる。それが果てしなくつづく。そんな話し方だった。

そのとき大江は、創刊されたばかりの雑誌に文章を書いたから読んでくださいと、『白い椅子』という雑誌を手渡してくれた。特集タイトルは、「老人の性」。そして、大江が寄稿した文章は「結婚とは何か——友愛と性愛について」。ハンセン病療養

所に暮らす女性との対話からなる一文で、性愛を超えた友愛は可能か、そんな主題の文章だった。中学生に読ませるような内容ではないと、普通の大人だったら、そう考えるだろう。

初対面のやりとりは、中学生の私に強烈な印象を残した。私を子ども扱いせず、一人前の人間として誠実に接してくれた初めての大人が、大江満雄だったのだ。

大江との二度目の対面も、翌年の東京宿毛会だった。このとき、大江は足を悪くして長く立っているのがつらいからと、すぐに中座してしまった。足を引きずり、杖にしがみつくような後ろ姿を見送ったのは私だけだった。それが、私にとって大江との最後となった。饒舌と静謐。対照的な詩人の姿が記憶に残る。

大江満雄は、一九〇六年、高知県幡多郡奥内村泊浦（現・大月町）に生まれた。父の影響で少年時代より教会に通い、キリスト教は終生のよりどころとなった。一五歳のとき、大水害が故郷を襲い、一家離散。父とともに上京するが、父は急逝。石版技術を学びながら詩人・生田春月の同人詩誌で詩作を始める。

やがてプロレタリア詩運動が盛んになると、その中心的な担い手となる。キリスト教とマルクス主義とをいかに統一させるかが、大江の詩の主題となった。治安維持法による二度の検挙ののち、獄中で転向。戦争詩を書くようになる。戦後は対話

的精神に満ちた抒情的思想詩の世界を展開した。

一九九一年一〇月、大江の訃報を新聞で知り、信濃町の千日谷会堂せんにかたにでおこなわれたお別れ会に出かけた。当時、大江の作品はすべて絶版で入手することは不可能となっていた。大江満雄の著作集をつくることはできないだろうか。このときお別れの言葉を述べた哲学者の鶴見俊輔氏に、私は相談の手紙を書き、編集委員に詩人の森田進氏、渋谷直人氏らを迎えて『大江満雄集 詩と評論』全二巻（思想の科学社、一九九六年）を出すことができた。

編集作業のなかで、大江が戦後、ハンセン病療養所の詩人たちと交流をつづけた事実を知った。

ハンセン病とは、かつて日本では「癩ろう」と呼ばれた、らい菌による感染症である。菌の発見者、ノルウエーの医師ハンセンの名をとって、現在ではハンセン病と呼ばれている。

きわめて弱い感染力しかなく、乳幼児期に感染者と濃厚接触しなければ感染しない。成人して普通の免疫力があれば、感染は起こらない。現在は多剤併用療法によって全治する。

特效薬が日本で使われたのは戦後からであり、戦前までは不治の病であった。手

足の指先や顔面の神経が麻痺し、変形が起こる。後遺症が目に見える場所に出るため、差別の対象となった。世間で暮らしてゆくことが困難な患者には、物乞いや浮浪者となる者が多かった。

ハンセン病対策の法律は、一九〇七(明治四〇)年制定の「癩予防ニ関スル件」が最初である。これは浮浪者のなかに含まれる病者を取り締まるものであった。病者が人目につく場所を自由に歩き回することは、「文明国」の恥とされたのだ。

一九三一(昭和六)年制定の「癩予防法」、これによって、在宅を含む全患者が対象とされ、全国にできた療養所に根こそぎ收容する「絶対隔離政策」がとられるようになった。在宅通院治療を唱える医師もいたが、社会防衛が優先された。当時の都道府県では、県内から患者を一掃しようと「無癩県運動」が推進されたりもした。

一九五三年、戦後の新憲法のもと、戦前の「癩予防法」が絶対隔離政策はそのままだに、「らい予防法」となって存続することが明らかにすると、全国の療養所の入所者からいっせいに反対運動が起こった。これは「らい予防法闘争」と呼ばれた。しかし、患者側の運動の甲斐なく、同年、同法は公布された。

一九九六年三月にらい予防法が廃止されるまで、入所しても退所の規定はなく、子孫を残すことは許されず、園内での結婚の条件として断種手術がおこなわれた。終身強制隔離・患者絶滅政策が存続したのだった。

現在、日本では新規患者はほとんど発生しないが、社会復帰することができず、全国の国立ハンセン病療養所一三施設で暮らす元患者は一七一人、平均年齢は八三・九歳（二〇一五年五月現在、厚生労働省）。世界ではアジア・アフリカ・南米を中心に、年間約二二・八万人（二〇一〇年、WHO）の新規患者がいる。

大江がハンセン病者と出会ったのは戦後間もないころだった。厚生省（現・厚生労働省）で『療養文芸』という国立療養所の患者の文芸作品を出版する計画があり、応募された作品を見て感動したのがきっかけだったという。GHQ（連合国軍総司令部）の反対によって『療養文芸』出版が頓挫したため、ハンセン病療養所の入所者の詩作品を引き取って、大江が独力で出版の計画を進めた。

療養所の文芸活動といえば、戦前から北條民雄（一九一四～一九三七年）の小説「いのちの初夜」（『文學界』一九三六年二月号）や、明石海人（一九〇一～一九三九年）の歌集『白描』（改造社、一九三九年）などが知られている。このころの文芸作品は、不治の時代を反映してか、自殺を肯定したり、すすり泣きによって内向する人物が登場する。しかし、大江が接した戦後の詩人たちは、病気が全快する時代に生き、年齢も二〇～三〇代と若く、明るく対話的であった。

彼らの詩作品は、らい予防法闘争のさなか、『日本ライ・ニュー・エイジ詩集

いのちの芽』（三一書房、一九五三年）と題する七三人のアンソロジーとして、大江の編集・解説によって世に送り出された。

『大江満雄集 詩と評論』を刊行した一九九六年は、らい予防法が廃止された年と重なる。これをきっかけに、『いのちの芽』に詩を寄せた詩人たちを全国の療養所に訪ね、大江とのあいだにどのような交流があったのか、話を聞くことはできないだろうか。そう思い立ち、全国への旅が始まった。

本書のタイトルにある「来者」とは、大江の造語である。過去に負の存在とされた「癩者」を、私たちに未来を啓示する「来るべき者」と考えたのだ。

本書は、大江満雄と詩作を共にしたハンセン病療養所の生存者をめぐる探訪記であるとともに、詩人によって「来るべき者」と呼ばれた人びとが語る、知られざる戦後史、文学史、社会運動史である。

なお、詩などの引用にあたっては、読みやすさを考慮し、旧字を新字に改め、適宜ルビを付した。本文中の「」は筆者による注記である。また、本書に掲載した写真は、とくに断りがないかぎり、筆者が撮影したものである。